韓国・国立木浦大学校での留学を終えて

文化学部文化学科 3 回生
宅見佳蓮

2018 年 8 月 20 日から始まった韓国・国立木浦大学校での約 10 カ月の留学生活が終了しました。約 10 カ月のうち、3 月から 6 月までの 3 か月間は 1 学期、6 月中旬から 8 月中は夏季長期休暇、9 月から 12 月までの 3 か月間は 2 学期、12 月中旬から 2 月中が冬季長期休暇となっています。木浦大学校は 7 学部 55 学科から成る国立総合大学です。私は、将来、韓国語学習者の増加や地元における観光業の発展、地域活性化に貢献したいと思っています。そのために、国立木浦大学校で実用的な韓国語を習得し、韓国の文化を学ぶことはもちろん、韓国と日本の文化や教育事情を比較し、今後の活動に活かしたいという思いを抱き、私は、2018 年度 2 学期から 2019 年度 1 学期の間までの 1 年間、人文学部日語日文学科への長期交換留学生として高知県立大学から派遣されました。他大学では、本来、3 月の年度初めから 1 年間交換留学生として派遣されるため、私が 2 学期からの 1 年間ということは現地の学生たちに非常に不思議がられました。さらに、大学内では年度初めにはある程度の交友関係もできているために、2 学期から突如現れた私を快く受け入れてくれる人がいるのかという不安も非常に大きいものでした。私が木浦大学校での生活を始めた時期が長期休暇期間中であり、ほとんどの学生たちが帰省していたことで閑散としていたキャンパス内は、その不安をより一層大きくしていました。私は 2 学期が始まる 10 日前から木浦大学校で生活を始めました。韓国での生活に慣れ始めた頃に、韓国での大学生生活も本格的に始まりました。ここでは、学校生活、寮、学校外での生活、韓国語能力について分けて報告します。

まず初めに学校生活についてです。各学期はじめには、学科ごとで開講集会が開かれます。学科内役員を中心に行われ、学科の教授の方々の話を聴くことが主な内容です。本来、1 学期に学科の新入生全員が自己紹介を行いますが、所属学科生の前で会長が私を新入生として紹介してくださり、学生たちは日語日文学科の一員として明るく歓迎してくれました。そして、授業が始まりました。授業は、履修科目によって学生ごとで異なりますが、1 コマ 90 分で、午前９時３０分から始まり午後６時までです。教室移動兼休憩時間が設置されていないため、どの授業もたいてい、授業終了２０分前には終了します。私の所属は、「日文学科」であるため、日本文学をメインとした授業を履修しました。しかし、あくまで所属学科であり他学科の授業を履修することも可能です。日語日文学科の授業だといっても当然、現地の学生のための授業であるためすべて韓国語で進められましたが、日本でも学習をしたことある文学に関する内容と重なる部分もあるため、理解に苦しんでいることはありませんでした。新学期では、授業にも慣れ、県立大学では英語を中心に履修しているため、日語日文学科の授業に加え、英語英文学科の授業の履修にも挑戦しました。教科書などの教材販売は、基本的に学生が教科書原本を購入することは無く、学校の門を出ると、「印刷屋」があり、授業名を伝えると、事前に教授が注文していた教材の複製を購入できます。そのため、どの教材も約８００円や約９００円と手ごろな価格で購入することができました。それ以外に

必要な教材は、授業中に教授が印刷したものを配布してくれます。また、各自必要な印刷物は、学校内の印刷室で印刷し、購入するというシステムでした。日本のようなパソコン室はあるが、印刷は印刷室にのみ限定されていました。

次に、コミュニケーションについてです。先に述べたように55学科もあるとなると学生数も非常に多く、留学生に関心を持ち接してくれる学生も比較的多く、留学当初心配していた交友関係に悩むことは1日もありませんでした。おかげで、毎日有意義な時間を過ごすことができました。学生の中には、留学やワーキングホリデーで日本語を学習している人もいるため、コミュニケーションに困ることはほとんど無く、私が韓国語でわからない部分があれば、その場で直接教えてくれました。多くの教授、学生たちが助けてくれたおかげで、私は、留学を始めて 3 カ月ほどで意思疎通に難が無い程度に韓国語を話せるようになっていました。そして、同じ学科の 1 年生数人と 1 学期から 1 年間交換留学生として来ていた日本人 2 人と私で韓日文化交流サークルを結成しました。活動内容は、日本語と韓国語の学習です。授業だけでは補えない「会話能力」を実践的に向上させられる場を目指し、毎週水曜日の放課後に活動していました。木浦大学では、サークルを立ち上げると、初期メンバーの成績に加点という制度があり、さらに資格試験などで、個人が結果を残すと、そのサークルのおかげとされ、属しているメンバーに奨学金が支給されるというのです。私たち留学生も関係している制度でした。学生自身が学習能力向上の追求のために、伸び伸びと積極的に行動できるこの制度には驚かされました。年度が替わった新学期でも、異なるメンバーで「ネイティブスピーカーを作ること」を目標に掲げ、毎週火曜日を活動日としお互いに韓国語能力、日本語能力を伸ばすことができました。さらに、全学部生が参加できるサークル活動にも参加し、私は友人の紹介で「映画サークル」へ加入しました。映画鑑賞という共通の趣味を持つ学生が集まり、週一回映画鑑賞会を行いました。映画について意見交換をすることで、所属学科だけにとどまらない、他学部他学科の学生たちとも深くかかわることができました。

二つ目は、寮生活についてです。学生寮は、留学生のための国際寮というものは無く、学部関係なしに 2 人部屋でした。部屋は学期ごとに変わるが、私のルームメイトは、どの学期も韓国の年齢で同級生の韓国人でした。ルームメイトは、日本語を話すことができないため、韓国語で会話をしていました。寮内は、各階に共有のシャワー室と化粧室、休憩室があり、Wi-Fi も完備されているため、非常に快適に過ごすことができました。食事は、寮の外にある「学生生活館」にある食堂で、寮生証があれば、平日休日ともに朝昼晩 1 日 3 食食べることができます。長期休暇や日本のお盆に当たる「チュソク」という中秋節などの大型連休中は運営していません。洗濯室も同生活館内にあり、1回１０００ウォン(約100円)で可能でした。売店と休憩室も同じ館内にありました。また、学期が終業すると長期休暇中に大学内の寮に滞在することはできないため、新学期開始まで寮に滞在しようとすると、事前に申請する必要がありました。新学期の寮滞在申請は留学生も、現地の学生と同様自分でしなければならならないので木浦大学校の国際交流課の方と頻繁に連絡を取りました。私は、前の学

期に親しくなった現地の韓国人の学生と一緒にルームメイト申請を行いました。新学期が始まるまでの長期休暇期間中は、以前県立大学へ語学研修生として来て親しくなった学生の釜山の実家でホームステイをさせてもらいました。さらに、留学最終学期終了後は、木浦大学校の友人の光州の実家でホームステイをさせてもらいました。実際にホームステイを経験することで、大学内の寮生活では経験することができない、現地の実際の生活を体験することができました。（韓国ではキリスト教を信仰している家庭も多いため、日曜日には一緒に教会に通うなど）

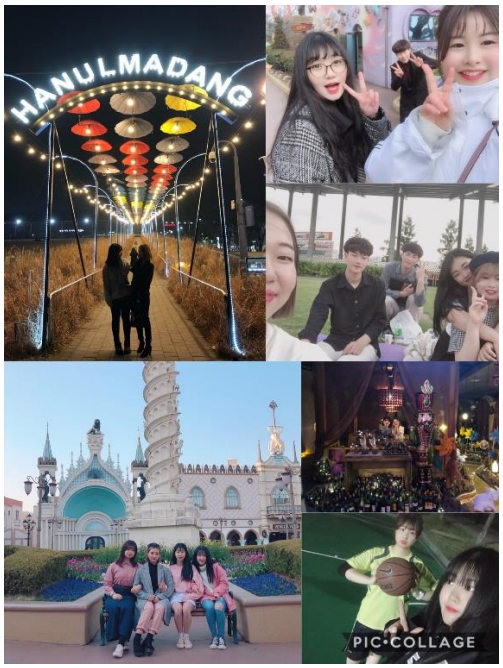
次に、学校外での生活についてです。私は、授業がない週末や韓国の祝祭日には、大学のある木浦市内だけでなく、積極的に他の地方・地域へ足を運びました。私は、歴史に関心があるため各地の文化財や、木浦市内にある歴史館、全羅道にある韓国の歴史上重要な人物に関する資料館へも訪れました。長期休暇期間中には、韓国南東部に位置する慶尚道にある歴史文化都市にもなっている慶州市を訪れ、慶尚道の歴史についても学習しました。全羅北道全州市では、韓服体験もしました。連休時はソウル旅行もしたが、江陵道へ留学中に行けなかったのが残念です。このように、私は留学中に様々な地域を訪問しましたが、特に印象深く残っているのは、木浦市内にある「木浦近代歴史館」です。現在、歴史館となっている建物は、「旧・木浦日本領事館」です。訪問前、この歴史館に関する話は少し耳にしたことがありましたが、実際に訪問すると、想像を超える緊張感が走りました。木浦市は、旧日本軍の拠点であり、日本統治時代には多くの日本人が住んでいたため、歴史館付近には昔の日本家屋も残っています。１９７０年代以降には、大都市の一つに含まれていた木浦の経済も急速に衰退したが、発展が遅れていることで、田舎都市ならではの風景を見つけることができました。歴史館へ行くことで、「日本人の街」であったという過去が、木浦市、そして韓国にあったことに改めて気づかされました。変えられない過去の事実を、現代生きる私たちはきちんと受け入れ、理解することでこれからの日韓関係の理想を追求していかなければならないと考えます。また、海外で生活をするうえで、現地の歴史を知ることはひとつのマナーであると思います。

そして、韓国語能力についてです。約 10 カ月が経った現在では、私自身の韓国語能力は留学前の予想をはるかに上回るほどに伸びました。独学で勉強していたとはいえ、やはり実際に言葉を生活の中で毎日使うとなると、日本語にはない発音を使うときに、それまでスムーズに行えていた会話が止まってしまうこともありました。しかし、現地の友人たちがその場で私の間違った発音を指摘してくれ、ネイティブと同じ発音ができるまで指導をしてくれました。そのおかげで、外出先で私に道を尋ねてくる人たちに、会話の相手が日本人だということが露見しない程に韓国語を話せるようになりました。また、私の韓国語の能力は木浦大学校へ留学をしたからこそここまで伸ばすことができたと思います。留学中に友人とソウルへ旅行をしましたが、ソウルは木浦に比べて、人気の高い観光地であるため、日本人が特に多く、市内を歩いていると日本語表記もしばしば目に入ってきます。ソウルで 4 日間過ごし、木浦のような日本人がほとんどいない地域で韓国語を学ぶことは、短期間でも集中

して語学力を向上させることができるというメリットがあるということに気付きました。反対に、地方には日本と同じように方言があるため、会話中に出てくる地方特有の言葉の理解には苦労をしました。しかし、冬期休暇中に釜山、夏季休暇中に光州でホームステイをさせてもらったことで、全く違う二つの地方の言葉を理解できるようになりました。

最後に、韓国での留学を通して次のようなことを実感しました。まず、韓国からみた日本についてです。日本人の中には優柔不断な人が比較的多いと思います。反対に、韓国人の中には物事を早く決断できる人が多くいると思いました。そして関心のないことに時間を割かない人が韓国には多いと思いました。決断力があり、自身にとって有効な時間の使い方ができることは、関心が向くことに集中でき、より一層幸せな時間を自ら作り出すことができるので非常にいいことだと思いました。しかし、ある授業で「自分に不足しているもの」についてグループディスカッションを行ったとき、「決断力」と答えている学生が多くいたので驚きました。さらに、日本人特有の「本音と建前」文化についてです。韓国語でも「本音と建前」と同じ意味を持つ言葉はあります。しかし、一緒に生活してきた学生たちを見ると、気に入らないことがあればその場で話し合い自分の考えや意見を正直に言いあうことで解決していました。自分の思いを素直に打ち明けないのはかえって相手をいやな気持にさせると友人は言っていました。自分の思いは言わなければ伝わらない、というのはわかってはいることだけれど、日本人の中ではこれができない人が多いと思いました。ただでさえ言葉も文化も異なる海外の人とかかわるうえで、意見交換は重要になってくるので、その点を意識すると自分の意見に自信をもち発言できるようになりました。そして、外国人向けの語学堂生ではなく、現地の学生と同じ学部生で、同じ空間で授業を受け、課題を提示され、中間・期末試験を受け、評価をしてもらうことでまさにリアルな韓国の大学生生活を経験することができました。キャンパス内のどこにいても、留学生として私に接するのではなく、木浦大学生として多くの人が関わってくれました。大学外へ出ても、外国人としてではなく一人の人間として接してくれました。私は、非常に多くの現地の方々の温かい助けに支えられたことで、サークルの結成やホームステイ、韓国での奉仕活動や学校行事への参加等の様々なことに挑戦し続けられる約 10 カ月にできたと思いました。

PIC•COLLAGE
PIC•COLLAGE


HANULMADANG
PIC•COLLAGE